



Title	日本文化としての書道につながる漢字語彙指導 : 留学生教育の実践より
Author(s)	馬場, 裕子
Citation	間谷論集. 2021, 15, p. 111-122
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/83217
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

〈研究ノート〉

日本文化としての書道につながる漢字語彙指導

——留学生教育の実践より——

馬場 裕子

〈キーワード〉 留学生教育 漢字語彙 日本文化としての書道 漢語

1. はじめに

筆者が外国人留学生教育に当たり始めて20年が経過したが、当初、留学生の来日動機は日本語学習そのものを目的とする学生が多く見られた。しかし、近年は日本文化に惹かれて日本への留学を決意したという学生が少なくない。サブカルチャーと称されるアニメ・マンガやコスプレ、伝統文化の茶道や書道、建築に興味を持つ留学生も多くを占める。例えば、筆者の主宰する書道教室の体験授業を受講し、帰国後もオンラインで受講を続けている留学生もいる。書道は、世界で唯一漢字をモチーフとした芸術である。また視覚芸術であると同時に、表現自体が文字として意味を持つ芸術でもある。それゆえに、例えば漢字をモチーフにした作品制作を行うならば、漢字そのものが持つ意味を理解し、より深い造形作品へと昇華させて欲しいと考えるのである。そこで、筆者が関わる大学の留学生実習科目「中上級漢字語彙」の中で日本文化としての書道への橋渡しとなる授業実践を試みた。本稿は、その授業実践報告である。なお、この報告で使用している写真は全て筆者が撮影し、学生の許可をとって掲載していることを断わっておく。

2. 実践の場の特徴

2-1. 留学生コース

本稿の実践研究対象とした大学は、日本国内の関西圏に位置する国立O大学である。O大学では、留学生教育プログラムとして4つのコースがある（2019

年度)。

学部留学生予備教育プログラム(年間35回)、日本語・日本文化研修留学生プログラム(2学期制各15回)、短期留学特別プログラム(2学期制各15回)及び私費外国人留学生予備教育プログラム(秋～冬学期18回)の4つである。また、学生の能力はアチーブメントテストの総合評価により、初中級、中級、中上級、上級の4段階にレベル分けされている。

その中の日本語・日本文化研修留学生プログラム、短期留学特別プログラムの選択科目の日本語実習科目として春～夏学期開講の「中上級漢字語彙」科目で当該授業を行った。2019年度も2020年度も「漢字語彙」分野の日本語実習科目の開講科目数は12科目である。大きく変更があったのは、それまで日本語実習科目の中に含まれていた書道が、研究科目として「日本歴史文化学研究基礎」の中に移行されたことである。初級・中級段階の学生にとって漢字語彙の中の書道は大きな役割を担う。硬筆では最も再現しにくいのが、書法上の「とめ・はね・はらい」の3要素である。毛筆を用いてこそ、この3要素は、明確に表現ができる。また、大きく書くことによって漢字細部の観察も学習者にとって容易になるのだが、「漢字語彙」としての書道は事実上開講されなくなった。

今期受講した留学生は、ブラジル人留学生2名、フランス人留学生1名、スイス人留学生1名、スウェーデン人留学生2名、中国人留学生1名、タイ人留学生3名、ベトナム人留学生1名の合計11名が受講した。彼らは、2019年10月に入学し2020年8月に当該コースを修了した。

2-2. 授業設定

「中上級漢字語彙」科目は、留学生のレベル設定として「一般的な漢字のうち、やや高度なものも読み書きすることができる。一般的に使用されている漢字語彙を理解でき、自分の得意分野であればそれよりもやや高度なものも理解することができる」となっており、授業例として「常用漢字・同音異義語・論文やレポートの漢字語彙など」とされている(O大学における日本語科目と能力記述)。さらに中上級漢字語彙開講科目として4つの選択科目がある。「漢語の類義表現」「同音異字語」「語構成から学ぶ漢語」「連想マップで学ぶ漢字語彙」の4テーマ

の授業である。この内、筆者は「語構成から学ぶ漢語」を担当した。授業のねらいは「漢語の構成の仕方についての知識を身につける。また、未知の漢字語彙であっても、読み方を推測し、意味の見当をつけることができるようになる」と設定されている（令和2年度春～夏学期 授業テーマ一覧（日本語実習科目））。

また、本年度は Covid-19 の影響により、本学の授業は前期は全てメディア授業に切り替えられた。学生にとっても授業者にとっても初めての事態であり、双方のインターネット環境や PC の整備、インターネット技術の習得など時間制限がある中での、ほぼ見切り発車となった。筆者は、大学側から提供されたメディア授業のテレビ会議システム「zoom」と教授用アプリである「ロイロノート」を併用するリアルタイムの授業スタイルを選択した。一部シラバスの変更を行って、授業は4月20日から8月3日まで行なった。その間4月から5月は、感染症による政府の緊急事態発出中であつたので、学生は各部屋でメディア授業を受講することになった。

3. 具体的な実践の内容とその過程

3-1. 授業内容

本授業は、「語構成から学ぶ漢語」が授業テーマであるので、まず、漢語とは何かという知識面の拡充と浸透を図るために漢字の由来は欠かすことのできない具体的素材であり、白川静の『漢字の世界1』『漢字の世界2』（白川 2003）を参考図書として使用した。次に六書¹について解説し、漢字は丸暗記ではなくそれぞれの部分に意味があり、その組み合わせによって漢字が構成されていることを教示し、読みの検討をつけることを試みさせた。その際に、筆ペンを用いて漢字の細部にまで観察が行き渡るように工夫した。

第1回目の授業は、メディア授業の「zoom」と「ロイロノート」の使用方法を説明し、全員がそれらのアプリが整ったところで、授業ガイダンスを行なった。続く講義の内容は、1) 漢語、2) 梵語、3) 和製漢語、4) 漢語の発音、である。第2回目講義内容は、1) 漢字と中華文明、2) 漢字圏と漢字文化圏、3) 日本の歴史区分、4) 日本の歴史年表、である。3回目講義内容は、1) 漢字の起源、2) 甲骨文字、3) 『説文解字』、4) 演習である。漢字は中国黄帝の

史官であった倉頡が作ったと言われているが、当時占いである「卜」の結果を記するために必要であった。その際に使用されていたのが甲骨文字と呼ばれる文字である。甲骨文字は象形文字であるがモノを模った文字であるので、例えば馬の甲骨文字を指し示し、「何か」と問うたところ「馬」と即答するなど、学生らは何を象徴しているのか比較的検討をつけやすいものであった(写真1 筆者自筆)。



写真1)



写真2)



写真3)

それらを筆ペンで写字することを課題としたところ、初めて毛筆を使用した学生も元の形に忠実に写字できていた(写真2、3)

『説文解字』は周時代に許慎が作った漢字の解説書である。その中の漢字の構造法、六書である象形、指事、会意、形声、仮借、転注を解説した。また、漢字の書体に触れ、古い順に甲骨文、金文、大篆書、小篆書、隸書、楷書があることを解説した。漢字に興味を持たせる目的で、筆ペンによる甲骨文字の創作を例示した(写真4 筆者自筆)。学生にも同じように甲骨文字で創作をさせた(写真5)。

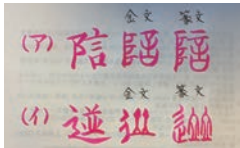
4回目の講義は、説文解字の部首540字を現代の文字と対応させながら、筆ペンで写字、細かな部分を対照させた。3回に分けてそれらを宿題とした(写真6、7)。

また、漢語由来の1) 数、2) 書・儒教、3) 精神・仏教、4) 食文化について解説した。1) の数については10までは「ひ、ふ、み、よ、いつ、む、なな、や、この、とお」と固有の読み方があり、11～漢語になること、助数詞においては基本的に漢語が使用されていることを解説した。第5回目の講義は、1) 動植物、2) 住居・建築、第6回目の講義は、1) 金属・鉱物、2) 雑貨、3) 医学をテーマとし、前半は漢語についての解説と、後半は筆ペン実習を交えて授

た（上掲書 p.69）。例えば、人、身、令、先、兄、光、元、比、北、従、保、介、歌、化など 51 文字である。写真 9 は、講義 13 回目に左向きの人と右向きの人を表し、左向きが前、左側が上位とされ、右向きが後ろ、右側が下位を意味していることを説明した。その上で、右向きの人つまり左側の上位の人が後ろになり右側の下位の人に従っていることから、上下関係のない 2 人が並んで「比」という字になり親しむという意味が生じたことを説明している。

また、漢字の形声の一部は「音符」といい音を表すことも示した。15 回目の期末テストで、問 1 は部首を組み合わせた漢字を創ることと、その漢字の読み方と意味の解説を問う問題で、問 2 は筆者が創った 2 つの漢字の読み方と意味を解説する問題を出题した（表 1）。なお、授業で配布した資料持込は認めた。

表 1 2020 秋学期期末テストと模範解答

期末試験2020春夏学期 中級漢字語彙 馬場 裕子 1)自分で作った漢字を筆ペンで書きなさい。読みと意味を日本語で書きなさい。	2)次の漢字の読みと意味を日本語で書きなさい。意味は漢字の成り立ちの六書に基づき考えて書きなさい。	
解答用紙 ロイロノートのカメラで 写真を撮ってアップして ください。 1)	模範解答 ア)読み;ゲン、ゴン 意味;左側の部首は、はしごを意味します。つまり天の神が天から降りてきたり昇ったりする道具です(p. 158)。右側は、サイの部分があります。これは神への祈りや願いを書いた紙を入れる器です(p. 139)。「言」の意味は神への誓いです(p. 150)。合わせると、はしごを昇り降りする神に祈りや誓いを届ける、伝えるという意味です。	
解答用紙 2)	イ)読み;ヘイ 意味;部首のしんによは道を行く意味があります(p. 135)。右側は、人が2人並んで立つ意味があります(p. 98)合わせると、人が2人並んで道を行く、という意味です。	

3-2. 学生の解説

学生の解答は以下のようなものであった（表 2～4）。尚、学生の日本語の助

詞と自動詞・他動詞の表記ミスは筆者が一部訂正した。問1は漢字を作る問題である。⑩⑪以外は正解とした。⑩⑪は問題理解が十分ではなかったが、⑩は3回解説を加え、最後は母語に訳した。しかし、伊藤（2013）の資料を用いて、漢字を創作するという意味が理解できなかった。⑪は、2回目で修正できた。しかし、この漢字一文字で「ようりよくそ」と読ませたかったが、「りよく」の部分が含まれていないので誤答とした。③については、少し飛躍しているが、右の手を表す部分は確かに書いてあるので、許容範囲とした。⑩⑪以外の学生は、読み方に関しては、音符が漢字の中に含まれており、授業中に解説した音符の概念が理解できていると判断した。この作字の問題から、漢字はそれぞれの部分が意味を持つこと、またその部分の一部を「音符」と呼び、漢字の読み方を表していることを理解できているかどうかを問うことができたと考える。

問2（ア）の漢字の「𠂔」は神が天と地を上り下りする時に使う「神梯（はしご）」を表す。古く天は神の住むところであり、地は神の降るところ、それをつなぐもの（上掲書：156）、とあるようにそのことに触れつつ、つくりの部分の「言」の説明を加えられていれば正解とした。「言」は「盟誓（神への誓いの言葉）」を表す（上掲書：150）。また、漢字には「音符」と呼ばれるように音を表す部分があるが、つくりの「言」が音を表し、「ゲン・ゴン」と読むことが記されていれば良い。問2の（ア）を解答順に学生の解答（一部表記の間違いを訂正）を示す（表3）。

このうち「神」という言葉を使っている学生は、①③⑤⑥⑦⑧⑨⑪の8名おり「神」への盟誓を表す「言」の許容範囲とした。「はしご」を使った学生は、①④⑦⑧⑨⑪と②のステップを入れると7名、昇り降りする意が含まれているのは①③④⑤⑦⑨⑪の7名である。天上の「神」がはしごを昇降し「神」と地上人が交信する意と解し、②は「神」との交信という意味が抜けていること、⑩は漢字の意味の説明が抜けていることで誤答とし、それらを除き他は正解とした。④についてはやや意識ではあるが、許容範囲とした。正解者は、それぞれ漢字を構成する部分の意味は概ね解説できており、漢字全体の意味も記すことができていると判断した。

表2 学生の解答 問1

問1	写真
① 木(部首＝意味を表す)＋亡(音部＝音を表す)＝「木亡」(ぼう)と読み、意味は枯れ木、水をやらなくて枯れた木。例えば、水をやらなくて枯れた木など。	1. 木+亡 = (ぼう)
② 「水」と「辶」を組み合わせ、意味は水を流れている道、「すい」と読む。	
③ 右手で「受」を手伝うところ。受けている手と渡している手を助け合う。→メルカリ。読みはユウ。	
④ 火という部首が「火」のことを表している。そして、音を表す部分は、「辰」なので「シン」と読む。「火辰」は自然によって起こった勢いのある火事という意味がある。「辰たつ(龍)」のように燃えている炎。	
⑤ 「鬼」と「辶」でお化けの道、この世とあの世を繋ぐ道。読み方、「鬼」が歩く道(「辶」)。読み方、キ(「鬼」は音韻部門)	
⑥ 飲んでいる時に、飲食の喉の代わりに、呼吸の喉に入ってしまった、チョークすること。読み方、しゅ。	
⑦ 「辶」と「光」で「光」は「火」と「人」を組み合わせた形。「火」は古代には神聖なものと考えられる。下の「人」は「火」を頭上にして、奉じているので、「光」は、神聖な火を守る聖職者をあらわしている。「辶」は「イ」と「止」の組み合わせで、「道を行く」ことを表している。従って、意味は神聖な職につとめる人はまわりに行き、「火」の神聖や光栄を周辺に広めること。読み、こう。	
⑧ 左の部分は道を表して、右部分は神への祈りを入れる器と火を表す。意味は道の途中で祈るために火を作る(キャンプファイヤーみたい)ということ。読み方、「火」からの「か」になる。	
⑨ 音を表すのは右の部分。「したごころ」は、感じの意味を表す。右の分は日本語で「集まる」ということも表す。意味は日本語ではない漢字だ。ドイツ語の「sympatisch」(シンパチッシュ)という形容詞は、相手を知らなくても仲良くしたいということで、その方の能力。にんべん(人)＋集まる＋したごころ(感じ)は「sympatisch」となる。	
⑩ 解答不可	
⑪ 読み方、ようりよくそ。植物の細胞の中にある緑色の色素。日光のエネルギーにより、炭酸ガスと水とから炭水化物を作る作用をする。	

問2の(イ)は、部首の「辶」は道を行くことを意味する(上掲書:135)。また、「並」は身分ある二人の者が、儀礼が行われる神聖な場所に正面を向いて並んで立つことを表していると考えられている(上掲書:98)ことから、二人の人が並んで進むという意味のことが書けていれば良いとした。音符は「並」で「へイ」と読む。問2の(イ)を解答順に学生の解答の中から意味の部分だけ(原文のまま)を示す(表4)。

表3 学生の解答 問2(ア)

	問2(ア)
①	「(ござとへん)=神様が天と地上を登り降りする時のはしごを考えました。言=取っ手のついた大きい針の形を表します。そして、下にはさいがあります。さいは神様にお願いをするために書いた文を入れる器です。意味は辛い時などに、嘘を言わないで神様へ誓うことや願うことを表すと思います。
②	ステップで話すこと。
③	誓った人のため、かみさまは天から降りて昇りする。
④	上司からの命令、高いところから「はしご」で降りた「言葉」だからである。
⑤	「言+言」漢字全体の意味:神の言葉、神の教え。漢字の起源の説明:「言」で昇り降りする「言」(この場合、言は神の話)。読み方:ゲン(「言」は音韻部門。)
⑥	読み方:ごん「話す」や「神と伝言する」時に立つところ。これは会意の漢字。
⑦	読み、げん。「言」は神が天と地を上り下りする時に使う「梯子」を表します。「言」は、神に祈る器「さい」の上に針(辛)を置く、「盟誓」(神への誓いの言葉)を表します。なので、神様の前に祈る器を置いて、神への盟誓をして、この盟誓を神に届けること。
⑧	左の部分は「神様のはしご」のような形のもです。また言の部分は神へ誓うということのような意味を表しています。ですから、神様とのご相談に関係のある意味になるかもしれません。読み方は「げん」かもしれません。
⑨	左の分は元々神が天と地をのぼり降りするの意味で、「梯子」を表す。右の分はサイ、神様へのメッセージを入れる箱に針が付いている。嘘をつかないことを表す。組み合わせている形は、神様への祈りになると思う。読みは「言」と同じ、ゲン、ゴンだと思う。
⑩	読み方、ゲン・ゴン・いう・こと。
⑪	読み方、ゲン。意味、左:梯子を表す。天の神が天から降りてきたり登ったりする道具です。右:サイの部分があります。神への祈りや願いを書いた紙を入れる道具です。「言」というのは神への誓いです。意味:梯子を昇り降りする神に祈りや誓いを届ける、伝えるという意味です。

②は人が「並ぶ」や「進む」という意味の説明が欲しいところである。④⑤⑥⑧は、並んで行くその状態を指す道や巡礼という名詞で答えているが許容した。⑩は「進む」、の意味が抜けている。②と⑩以外は概ね漢字の組み合わせから考えた意味を答えられていると判断し正解とした。

4. 結論

このように講義の1～10回目までは、漢語の歴史や音韻、また中華文明と漢字の起源、中国の歴史と日本の歴史の対比をさせながらの概観、『説文解字』と六書、漢語の具体的な語彙を品詞別に解説した。11回目から14回目は、漢字の成り立ち、つまり構造についての解説と筆ペンによる実習などを行いながら進めた。

期末テスト結果から9割の学生は、漢字が意味を表す「意符」と音を表す「音符」から構成されていると理解したと言える。メディアの授業ではあったが、学生と会話する中で、ブラジル人留学生が「木の部分がありますね」やスウェーデン

表4 学生の解答 問2 (イ)

	問2(イ)
①	一律な並び方、一緒に行くこと。
②	普通の道。
③	パレード、一緒に神聖な場所に向いて歩く。
④	並べて行く道、デッドエンドのない道という意味。
⑤	詣で、遍路、巡礼。
⑥	並べる道みたいな意味、キューや行列みたい。
⑦	二人が並んで一緒に行くこと。
⑧	神聖な場所まで人々が並んでいる道ということ。
⑨	戦争の時同じく歩くの意味を持っている動詞。英語の「march」のように。
⑩	並ぶ。
⑪	人が並んで道を行くという意味。

人留学生が「右側は見るという字ですね」などと発話し、漢字を丸暗記ではなく部分に分けて理解している事がうかがえた。

この授業だけでは、日本文化としての書道につながったと断言はできないが、この授業を受けていた学生が、帰国後もリモートで筆者の書道教室に参加している。特に帰国直後は、この授業で学んだ篆書が篆刻の時に使われる書体であることを知り得て、ほぼ毎日のように篆刻を母国で行なっている。このように、留学をきっかけにして漢字語彙の授業から、日本文化としての書道へつなげていくのがこの授業の目的でもあった。

今後は、日本文化としての書道の奥義がリモートでどのくらい伝えることができるのか、稿を改めたい。

注

- 1 六書とは、漢字の構成法を6つに分類したもので、その種類は「象形、指事、会意、形声、仮借、転注」に分けられる（漢字成り立ち辞典：11）
- 2 （立命館大学 2016 白川フォント）。

参考文献

伊藤直樹（2013）日本文字文化機構編『漢字の成り立ち辞典』新星出版社 p.69,98,135, 139,150,156

白川静（2003）『漢字の世界 1』『漢字の世界 2』平凡社ライブラリー

独立行政法人日本学生支援機構

<https://www.studyinjapan.go.jp/ja/statistics/zaiseki/date/2019.html>（2020 年 10 月 25 日閲覧）

立命館大学 2016 白川フォント

<http://www.dl.is.ritsumei.ac.jp/Shirakawa/search/?#downloads>（2020 年 10 月 25 日閲覧）

馬場 裕子（ババ ヒロコ）

（大阪大学日本語日本文化教育センター 非常勤講師）

Teaching ‘Kanji and Vocabulary’ that leads to ‘Japanese Culture – Calligraphy’: Case of International Student Education

BABA Hiroko

This report is an initiative of the practical research class “Vocabulary & Kanji”.

In recent years, many students have become attracted to Japanese culture and decided to study abroad in Japan. Many international students are interested in Japanese subcultures such as Anime, Manga and Cosplay, they are also interested in traditional cultural properties such as tea ceremonies and calligraphy, and other cultural properties such as Japanese architecture. Calligraphy is one of the only artforms in the world with a focus on Chinese characters. Therefore, for example, if you create a work with a kanji motif, I would like you to understand the meaning of the kanji itself and sublimate it into a deeper modelling work. With this in mind, I tried to develop a lesson that would serve as a bridge to the ‘Japanese Culture – Calligraphy’ lesson, via the “Intermediate and Advanced Kanji & Vocabulary” course, which is a practical training course for the international students at the university I am involved with.

The origin of the Kanji was explained in the same way as “Setsumonkaizi”, and the details of the elements of the kanji were observed by using a brush pen.

The results of this class show that it is not sufficient to lead into the “Japanese Culture – Calligraphy” class. However, the students understood how to compose kanji. One of the international students has continued to take online lessons in “Japanese Culture – Calligraphy”, even after returning from Japan.